

特集

がん薬物療法の看護 ～“意思決定に つなぐ力”で実践！～



編集 浅野 耕太

Kota ASANO：京都第二赤十字病院外来化学療法センター/
がん看護専門看護師

特集にあたって

がん薬物療法は、新たな薬剤の開発やがんゲノムプロファイリング検査の導入により、治療の選択肢が増え、ますます多様化・複雑化している。従来の標準治療に加え、個別化医療（プレジジョン・メディシン）が発展し、患者ごとの治療戦略が重視される時代となった。

さらに、がん薬物療法の進歩により生存期間が延長したことで、治療選択の意味合いも変化している。かつては手術や強力な化学療法による集中的な治療が主流だったが、現在では手術療法や放射線療法に加えて、薬物療法を組み合わせた集学的治療が一般的になっている。また、治療が長期にわたることも多くなり、治療効果だけでなく、生活の質（QOL）を考慮した選択が重要となっている。このように治療が高度化・長期化するなかで、患者が治療内容を十分に理解し、納得した治療選択ができることを支える意思決定支援の役割がますます重要視されてきている。

たとえば、「副作用の負担を考え治療を変更するのか」「積極的な治療を継続するのか」「現在行っている治療を中断するのか」など、患者と家族が選択を迫られる場面は増えている。こうした状況において、がん薬物療法に携わる看護師には、治療の効果や副作用マネジメントだけでなく、患者の価値観や生活背景を考慮した支援が求められている。

しかしながら、これまでがん薬物療法に携わる看護師は、薬剤の作用機序や副作用を中心に学び、点滴管理や副作用マネジメントを中心に実践してきた。情報提供だけでなく、患者の選択を支える看護が求められる今だからこそ、看護師も単なる薬剤情報の習得だけでなく、いかに意思決定支援につなげるかを学び直すことが不可欠であると考える。

本特集では、がん薬物療法の知識を意思決定支援へと結びつける意義を再確認し、患者の意思決定を支えるために必要な視点や具体的な支援方法について解説する。